

ナラノミヤコ カルテット

他、一篇……鎌倉街道

藤首 亮 著
とうおびと りょう

歴史物語 ナラノミヤコカルテット

晩年の藤原不比等は、天智天皇と天武天皇の皇統争奪の渦中において、藤原永久政権への道を確立させた。聖武天皇は孫であり光明皇后は娘であった。独立させた四人の男子は同時に台閣に登り卿となり朝廷を牛耳った。ところが、この四卿が半年間で疫病で死ぬ。一方聖武天皇に男子が無く独身の娘が皇位につく〔孝謙・称徳〕だが道鏡を寵愛して自滅する。他 1 篇〔鎌倉街道〕九州で生まれ育ち生涯故里を懐かしんだ父への鎮魂。

ナラノミヤコ
カルテット

他1篇・・・鎌倉街道

藤首
亮著

目次

ナラノミヤコ・カルテット

<丁末の役	《西曆》……………(頁)
<乙巳の変	《五八七》……………・4
<草原にて	《六四五》……………6
<壬申の乱	《六五八》……………12
<平城京	《六七一》……………13
<遣唐使船	《七一六》……………16
<巨星墜つ	《七一七》……………37
<長屋王	《七一七・七二〇》……2
<藤原四卿	《七二九》……………43
<藤原広嗣	《七三七》……………44
・挙兵	《七四〇》……………45
・麻呂・史の死	《七一七・七二〇》……2
・冬の四日間	《七一六》……………16

鎌倉街道

鎌倉郡山ノ内庄 「戸塚」
・
・
・
・
・
・
・
58

序文

く乙巳の変までく

稲目―馬子―蝦夷―入鹿へと、蘇我の氏上の地位を独占すると共に、大臣位をも子から子へ相承して権力を握って離さなかった。

馬子は実妹【子姉君】の産んだ穴穗部皇子を殺して、同母弟の泊瀬部皇子〔崇峻〕を皇位に就けたが、五年の後、天皇を東漢直駒に命じて殺害させた挙句、暗殺実行者の駒の命を奪った。

蝦夷は皇位継承を巡り、己の意に反し叔父境部麻理勢が厩戸皇子【聖徳太子】の子山背大兄王を推戴し譲らぬ為この叔父を殺した。

入鹿は依然として人望の高い山背大兄王とその一族を理由もなく殺戮し、厩戸皇子の血脈を絶滅させ、祖父馬子の娘法提郎媛が生んだ、古人大兄皇子を次の皇位に就けるべく体制を固めた。

皇后宝皇女と同母弟で四十九歳の軽皇子は、自らの皇位継承に意欲を示して居たが、蘇我氏の威勢に抗し得る後ろ楯が無く、等閑視されていた。

一衣帯水の大唐、百濟、新羅、高句麗の動向は、動乱の国を逃れ来る難民によりもたらされていた。

長年に亘り皇室に多くの娘を嫁入させ、此処三代外戚としての地位を堅持して居る蘇我氏の血は、綱目の如くにつながり、条件を具えた非蘇我の王臣を見出す事は容易ではなかった。中大兄・大海人兄弟とて母方を四代遡ると蘇我稲目の娘堅塩媛である。

皇位継承の正統性から謂えば、皇后宝皇女【皇極・斉明】の第一子である中大兄皇子が最有力とされる筈だが、弱冠二十歳という若さのために、皇位との距離は未だ遠い存在であった。蘇我氏から抹殺される危険などを、身に感ずることは全く無いかの如き自由奔放な振る舞いを見せていた。

肥大化した蘇我本宗家に対しては、疎外された傍系の同族の中に不満が募って居り、権力奪取を狙う勢力が盛衰しながらも常在していた。

ここに極めて重要な事が行われた。蝦夷の弟蘇我倉山田石川麻呂の娘、蘇我越智娘（持統の母）が、中大兄皇子に嫁入したのである。

石川麻呂は、十七年前に殺された境部麻理勢と共に、山背大兄皇子を支持し蝦夷と対立した経緯が有り、二年前の山背大兄皇子とその一族殺戮に改めて怒りと恐怖を抱いていた。

さらに近頃、父蝦夷を凌ぐ権勢を頻りに振るい始め、長老の自分を事毎にないがしろにして止まぬ入鹿に怨恨の情を深めていた。

乙巳の変【西暦六四五】年、飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿が中大兄皇子の手により殺戮された。日本の国家形成の原初となる政治事変【大化改新】とも言う。

その後

左大臣石上麻呂はこのとき六歳であったが、物部宗家の嫡子の子として武器を握られ死を覚悟した。甘檜の丘が火炎に包まれるのを記憶していたが、右大臣藤原不比等はそれから十三年後に遅れて生まれたのだった。

白村江の戦い 麻呂は参戦したが不比等は未だ三歳の赤子だった。

壬申の乱 不比等は十四歳の少年であったが、一族の氏上の中臣連金が右大臣であり、乱後に斬首され不比等の立場は微妙だった。麻呂は大友皇子の死の最期を唯一人で看取り、御首を抱いて皇位篡奪を目論む大海人皇子の面前に立ったのである。国家存亡の危機の時代に、十九歳遅れて生まれて来たという事は、生涯どうしても越える事の出来ない、二人の上下関係だった。

二十年前、同時に大納言になったが麻呂が上席であった。そして今、不比等は麻呂の下位の右大臣だった。麻呂がちょうど還暦を迎えた年のことだった。藤原京を捨て平城京に遷都する際に、天皇の次の位に座る左大臣の麻呂が旧都の留守という閑職を勤めた。

不比等の専横を陰でなじる声も上がっていたが、麻呂は全く意に介する風が見えなかった。新都で今後行われる様々な改革に、自分は介入しないで、不比等に思う存分の力を發揮させようと決意していたのだった。遷都の栄光を自分の次席である不比等に独占させた。

蘇我入鹿の首を誰が切り取ったのか？は知られていない。そこで麻呂の父宇麻呂を登場させたのである。壬申の乱に敗北した大友皇子の最期にその首を落とす役割が【物部】石上麻呂に委ねられる必然を描きたかったのである。

それでは何故麻呂に、皇子の首を斬らせたのか？大友皇子を死に追いやり皇位を篡奪した負い目を持つ天武天皇【大海人】に対し、畏怖を抱かせる為にある。物部氏がいつきまつている石上神宮の主祭神の布都御魂大神は、神武天皇の東征を助けた霊剣であり【物部】石上の嫡流である麻呂に大友の怨霊を封じる役目を果たさせようと天武天皇【大海人皇子】は考えた、と、言いたいのである。

麻呂が遺稿に記述しているように、晩年の天武天皇は大友皇子の怨霊に苦悩していた。皇后持統、太政大臣・武市皇子、以下天武皇統に繋がる皇族はすべて麻呂の霊力にある種の恐れを抱いていた。当時の平均寿命が四十歳といわれる中であって、七十八歳で死するまで、左大臣の不動の地位を保ちえた理由はここにあった、と、言いたいのである。

麻呂の娘が不比等の三子馬養の妻となり広嗣・良継を生んでいた。天武の皇統にどうしてか強健な男子の誕生が無く、元明・元正と女帝が二代皇位をつなぎ、不比等の孫首皇太子の成長の時を稼いでいた。

皇太子妃の安宿媛も不比等の娘であった。皇子の誕生を期待されていたのだが、未だにその兆しが無く、先々の皇位継承に

不安があつた。

養老元（七一一）年三月三日、長屋王邸の曲水の宴席で麻呂は七十八年の生を終えた。不比等は三年後、日本書紀の完成を見届け、この世から消えた。六十三歳だった。

麻呂と不比等の後は聖武天皇の勅令すら撥ね返す力量の天武天皇の孫長屋王であつた。しかし八年後、何等の罪も無い左大臣長屋王は、**権力奪還を目指す不比等の四子に殺害されてしまふのだった。**

そして八年後の天平九（七三七）年、この藤原四子全員が突如として半年間で病死する。藤原鎌足から不比等そして四子へと営々として築き上げてきた藤原氏の終焉と見えた。藤原復権を目指し過激に反政府活動を繰り返す不比等の孫・広嗣は大宰府に左遷される。

そして広嗣は、藤原四家の総意を得られぬまゝ孤軍、九州で挙兵するが敗北し斬首された。天平十二【七四〇】年十一月のことであつた。広嗣は未だ、妻も子も無い二十代後半の若き公達だった。

序文

終わり

《補足》

くナラノミヤコく

天智・天武の皇統を基軸にした、熾烈な権力闘争に勝利し、藤原氏永久政権の道を開いた。その舞台は平城京だった。

くカルテツトく

藤原氏四代

鎌足く不比等く馬養く広嗣

不比等の四人の息子

南家・武知麻呂 北家・房前 式家・馬養 京家・麿

丁末の変（587）から58年後に

乙巳の変（645）が起こり、壬申の乱を経て

平城遷都（710）は更に65年後と言う時間の経過がある。

力量才能が及ばず物語の随所に間隙が生じた。

そして尚且つ、自分でやった「編集校正」が粗雑で作品の価値を損なつた。

平成二十年五月

丁末の変

物部守屋の父尾輿の時代「欽明天皇十三年（五五二）十月」百済の聖明王が釈迦像・経論・幡蓋などを献上したとき天皇は礼

拝すべきか否か群臣の意見を求めたが蘇我大臣稲目は礼拝すべきと主張し、物部大連尾興と中臣連鎌子は佛教の受容、礼拝に反対した。天皇は仏像を大臣邸に安置させ蘇我氏だけに礼拝の許可を与えた。ところが疫病が蔓延しおびただしい死者が出た。物部尾興と中臣鎌子は天皇に仏像の破棄を進言し、天皇は役人に難波の堀川に捨てて命じた。

其れから十五年後〔敏達天皇十四年三月（五八五）〕馬子は佛塔を橿原の地に立て法会を催した。疫病が起こりそれが国中に広がる。物部守屋と中臣勝海は、その原因を蘇我氏の崇仏にありとして、仏像の破却を敏達天皇に訴えた。

天皇は仏教を背景にして百済と緊密な連携の下に勢力拡大を図りつつある蘇我氏の意図を憂慮していた。皇后広姫の第1子押坂彦人皇子を皇太子として権限を与え外交を担当する馬子を牽制させた。天皇は物部と中臣に対し佛経排除を命じた。守屋と勝海は馬子の寺を壊し火をつけた。

それから三年後、敏達天皇が亡くなると皇位継承めぐり物部と蘇我は激しく対立した。蘇我氏は欽明天皇に二人の娘を嫁入させ十一人の皇子と七人の皇女を得ていた。皇位に就く用命天皇はまさにその中の一人だった。崇峻天皇・推古天皇・聖德太子も蘇我稲目の孫・ひ孫であった。

先帝の第一子押坂彦人大兄は蘇我の血を引かぬ稀有な皇子であった。

早くから非蘇我陣営から期待される存在であったが、容易には誘いに乗らず旗色を鮮明にしなかった。

敏達天皇葬儀の衆人環視の場で弔辞を読む入鹿の長大な剣姿を見て守屋が「雀に矢が刺さったみたいだ」と評した。それに対して、手を震わせる癖のある守屋を「あの手に鈴を掛けたらよい」と馬子が言った。この両者の他愛の無い言葉は、その日の内に飛鳥の人々すべてが知り、明日にでも戦闘が始まるのではないかと、顔色を変え腰を浮かした。

万人が次期天皇として認め、蘇我氏といえど反対できない押坂彦人大兄の門前で、蘇我馬子が放った刺客に中臣勝海が殺された。

門から振り向いて会釈する勝海の背後に抜刀した男が近づくのを見て押坂彦人大兄は「勝海」と絶叫し地を蹴った。勝海の首は胴体から離れたところに落ちた。

押坂彦人大兄の御太刀の切っ先に刺客の血が滲んでいた。

数日の後夜半廊下に座して星を見てみると、築地塀の向こうに人の気配がした。門を叩く音が聞こえた。訪問者は物部守屋であった。襲撃者の名は「とみのおびといちい」と言う残忍な男だと言った。守屋は「勝海はなににきたのか？」とたずねたかった。蘇我氏との対決の旗印となつて欲しい、と頼みに来るはずが無いと思つてはいたが聞いてみたかった。意外な言葉だった。

「私は皇子に皇位を継承させぬよう厭魅致しました。たとえ皇子にお許しをいただいたとしても、天神地祇に祈つたことであり、取り返しがつきません。やがて他人を呪詛した私はその罰をうけることになります」勝海はこういい残したと言う。

夜とはいえ屋敷に人の気配が無かった。百人ほど居た使用人が瞬く間に数人になった。と言う。臭覚で主の去就を敏感に感じ

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。